

病害虫発生予察情報予報第6号（9月の予報）

佐賀県

目次

1. 9月の病害虫	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠等について	2
4. 9月の予報	
<u>普通作物</u> （水稲、大豆）	3
<u>果樹</u> （カンキツ、ナシ、ブドウ、果樹全般）	10
<u>茶</u>	18
<u>野菜</u> （イチゴ、アスパラガス）	22
5. <u>病害虫診断状況</u>	29
6. <u>全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫</u>	30
7. <u>農薬の適正使用について</u>	32

今月のトピックス

長雨・日照不足が続いており、病害虫の発生しやすい条件となっています（[平成26年8月6日付け病害虫対策資料第10号参照](#)）。特に、水稲のいもち病の発生が多くなっているため、[警報第1号](#)（平成26年8月20日発表）を参考に、防除を徹底してください。

1. 9月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



いもち病による穂枯れ



イチゴうどんこ病



カンキツ黒点病



チャのクワシロカイガラムシ（雌成虫と雄繭）

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成26年8月25日 福岡管区気象台発表】

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の向こう1か月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報（確率予報）の内容について、本文中では便宜上、「気温やや高」、「降水量並」と簡略的に表現しています。

9月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	40	40
降水量	30	40	30

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
9月の平均気温	24.2℃	-0.4℃ ~ +0.4℃
9月の降水量	179.5mm	68% ~ 116%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量（平年比）

○予報の発生量は平年（佐賀県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

4. 8月の予報

普通作物

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除 のてびきの 記載ページ	備考
		平年比	前年比		
早植え水稻	紋枯病	並	やや多	144～146	
	トビイロウンカ	並	やや少	153～157	平成26年8月12日付け病虫害 対策資料第11号参照
普通期水稻	穂いもち	多	やや多	137～143	平成26年8月20日付け病虫害 発生予察警報第1号参照
	紋枯病	やや多	やや多	144～146	
	白葉枯病	並	並	143～144	
	トビイロウンカ	並	やや少	153～157	平成26年8月12日付け病虫害 対策資料第11号参照
	コブノメイガ	並	並	162～164	
早植え水稻・ 普通期水稻	斑点米カメムシ類	並	並	165～167 181～183	
大豆	紫斑病	並	並	199～200	
	ハスモンヨトウ	並	並	204～205, 208～212	
	カメムシ類	並	並	205～206, 212～215	

【特記事項】

- いもち病が多発している。発生状況は圃場毎に異なるため、必ず発生状況を調査し、葉いもちが見られる圃場では穂ばらみ期の防除を徹底する。発生が多いと予想される場合には穂揃い期にも防除を行う（平成26年8月20日付け発生予察警報第1号参照）。
- トビイロウンカについても、9月上～中旬に発生状況を調査し、老齢幼虫及び成虫が1株当たり5頭以上見られる圃場では臨機防除を行う。

水稻（早植え）

（巡回調査日：8月19日）



巡回調査時の生育状況

1. 紋枯病

1) 予報の内容

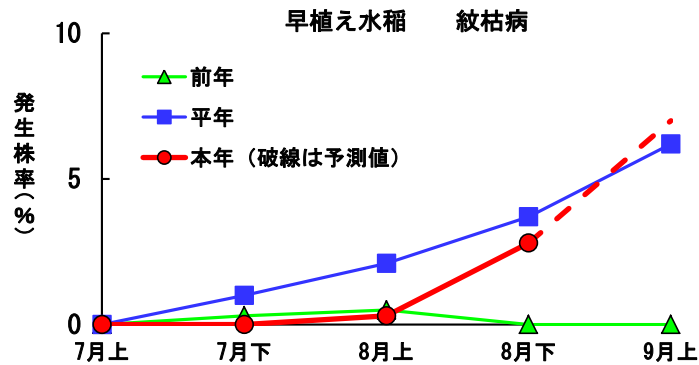
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- 巡回調査では、発生株率は2.8%（発生株率：平年3.7%、前年0%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉
- 気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±～+〉。〈気温やや高：±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生状況は圃場によって異なるので、各圃場を見まわり、病斑が上位3葉まで達している場合は防除を行う。
- (2) 薬剤防除の際には、周辺作物への飛散防止に努めるとともに、収穫前使用日数及び使用回数等の農薬使用基準を遵守する。



2. トビイロウンカ

1) 予報の内容

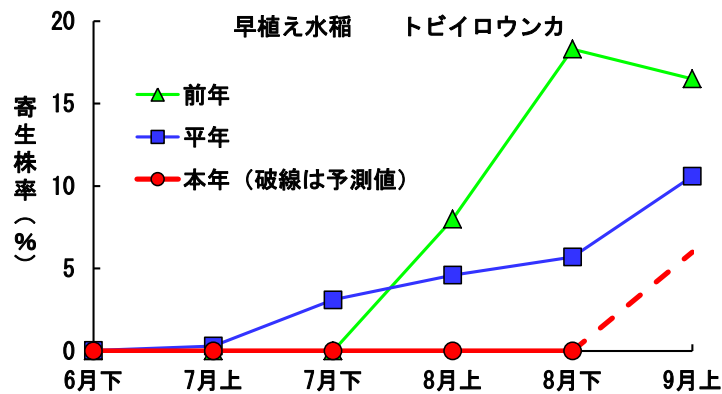
発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生を認めていない（平年5.7%、前年18.3%）。〈-~±〉
- (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±~+〉。〈気温やや高：±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生状況は圃場毎に異なる。このため、必ず各圃場毎に払い落とし法によって発生状況を調査し、防除の要否を決定する。
- (2) 9月上旬~中旬に老齢幼虫及び成虫の合計数が、1株あたり5頭以上の圃場では臨機防除を実施する。
- (3) 薬剤防除の際には、周辺作物への飛散防止に努めるとともに、収穫前使用日数及び使用回数等の農薬使用基準を遵守する。



水稻（普通期水稻）

（巡回調査日：8月18~19日）



巡回調査時の生育状況

1. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

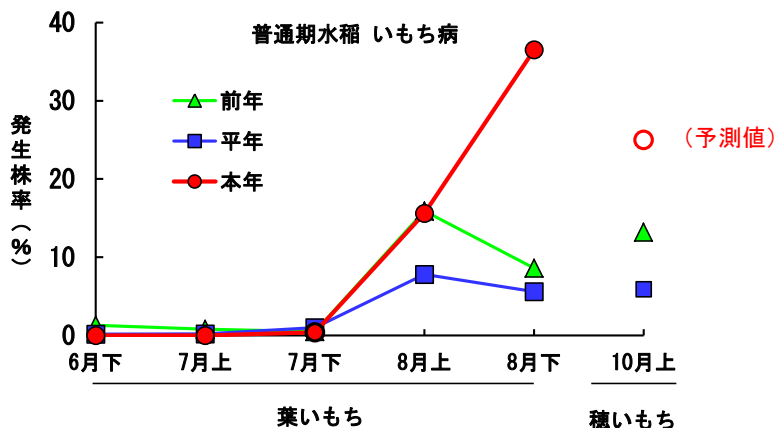
- (1) 巡回調査では、葉いもちの発生株率は36.5%（平年5.6%、前年8.6%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

(2)7月下旬以降、長雨・日照不足で経過しており、本病の感染・発病に適した条件が続いている。〈+〉

(3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)詳細な防除対策は、平成26年8月20日付け病害虫発生予察警報第1号を参照する。



2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

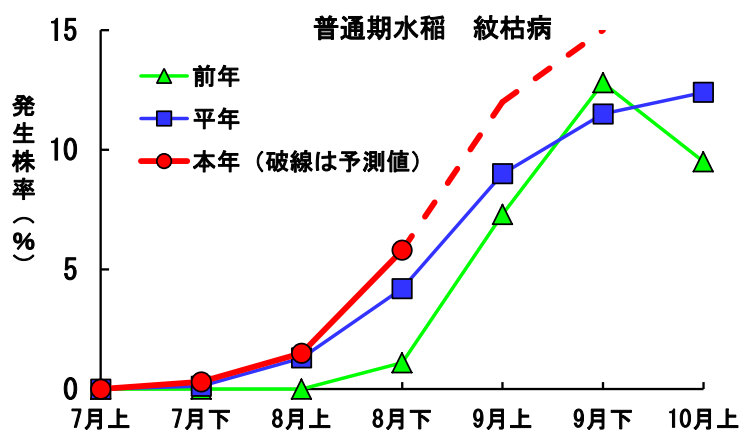
(1)巡回調査では、発生株率は5.8%（平年4.2%、前年1.1%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

(2)気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±～+〉。〈気温やや高：±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)本病の発生状況は圃場によって異なるので、各圃場を見まわり、病斑が上位3葉まで達している場合は防除を行う。

(2)薬剤防除の際には、周辺作物への飛散防止に努めるとともに、収穫前使用日数及び使用回数等の農薬使用基準を遵守する。



3. 白葉枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生を認めていない。〈±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)本病の発生圃場では、露が水稻に付着している時間帯は圃場へ入らない。

4. トビイロウンカ

1) 予報の内容

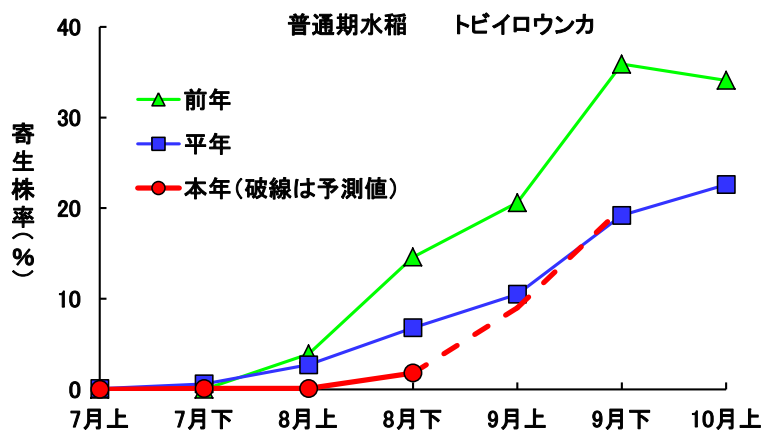
発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は1.8%（平年6.8%、前年14.6%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。〈-~±〉
- (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±~+〉。〈気温やや高：±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生状況は圃場毎に異なっている。このため、必ず、各圃場毎に払い落とし法（25株程度）によって発生状況を調査し、防除の要否を決定する。
- (2) 9月上旬~中旬に老齢幼虫及び成虫の合計数が、1株あたり5頭以上の圃場では臨機防除を実施する。
- (3) 薬剤防除の際には、周辺作物への飛散防止に努めるとともに、収穫前使用日数及び使用回数等の農薬使用基準を遵守する。



5. コブノメイガ

1) 予報の内容

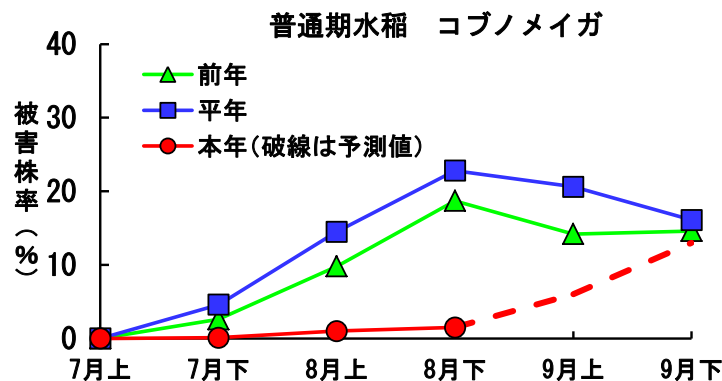
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、被害葉の発生株率は1.5%（平年22.8%、前年18.7%）であり、平年及び前年より少ない。〈-〉
- (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±~+〉。〈気温やや高：±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 9月上旬頃の発蛾最盛期を各地域で確認する。特に、「さがびより」、「ヒヨクモチ」等の品種や肥料の効いた圃場で、成虫の発生が多い場合には発蛾最盛期の約1週間後に防除を行う。



水稻（早植え・普通期）

1. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、

アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) イネ科雑草での捕虫網によるすくい取り調査（8月18～19日）では、カメムシ類の発生は平年よりやや少ない（表3）。〈－～±〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±～＋〉。〈気温やや高：±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い防除要否を判断する（防除の目安は、穂揃い期～乳熟期に、水田内の20回すくい取りで5頭以上）。

(2) 多発生の場合は穂揃い期と乳熟期の2回防除を行う。少発生の場合は乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に防除を行う。

表3 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数（2014年8月18～19日）

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカスジカスミカメ		ミナミアオカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
みやき町	道端	イノコクサ類	1	4	0	0	1	0	0	0	0
神崎市千代田町	道端	イノコクサ類	1	4	1	0	0	0	3	0	3
佐賀市西与賀町	道端	イノコクサ類	0	0	0	0	1	0	2	0	0
佐賀市東与賀町	道端	イノコクサ類	0	4	0	0	1	0	2	0	0
白石町①	空き地	ヒエ類	2	0	0	0	0	0	1	0	0
白石町②	道端	イノコクサ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小城市芦刈町	空き地	イノコクサ類	0	0	3	0	0	0	0	0	0
嬉野市塩田町	空き地	イノコクサ類	2	0	0	0	0	0	0	0	0
伊万里市	空き地	イノコクサ類	0	0	1	1	0	1	1	0	0
唐津市	空き地	イノコクサ類、 メシハ	3	0	1	0	0	0	2	0	0
武雄市北方町	空き地	イノコクサ類	6	6	4	0	0	0	5	0	0
小城市小城町	空き地	イノコクサ類	2	1	0	0	0	0	0	0	0
平均（本年）			1.4	1.6	0.8	0.1	0.3	0.1	1.3	0.0	0.25
前年			3.5	6.3	3.7	0.8	0.9	0.1	11.8	3.2	0.0
平年（過去10年の平均）			3.8	11.1	3.4	1.6	1.3	2.4	34.7	12.2	0.0

大豆

（巡回調査日：8月18～19日）

1. 紫斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 若莢期～子実肥大中期に、1～2回防除を実施する。



巡回調査時の生育状況

2. ハスモンヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生を認めていない（平年2.2%、前年0.9%）。〈-~±〉
- (2) 県内9地点のフェロモントラップでの誘殺数は平年よりやや少なく推移している（図1）。〈-~±〉
- (3) 気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±~+〉。〈気温やや高：±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 上位葉に白変葉（若齢幼虫の集団による被害）が増加し始めた時に防除を行う。適期防除を実施するためには、必ず圃場を見回って、白変葉の発生状況を確認する。
- (2) 防除後も、新たな白変葉の発生を確認したら、必要に応じて追加防除を実施する。
- (3) 莢の伸長初期~子実肥大中期に薬剤を散布する場合は、カメムシ類及び紫斑病にも有効な薬剤を選択する。

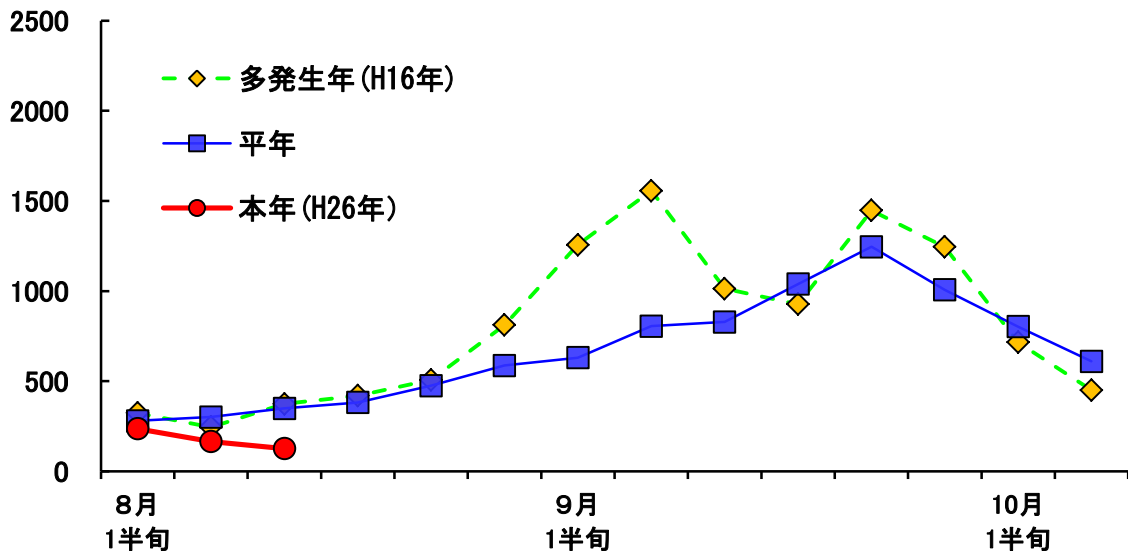
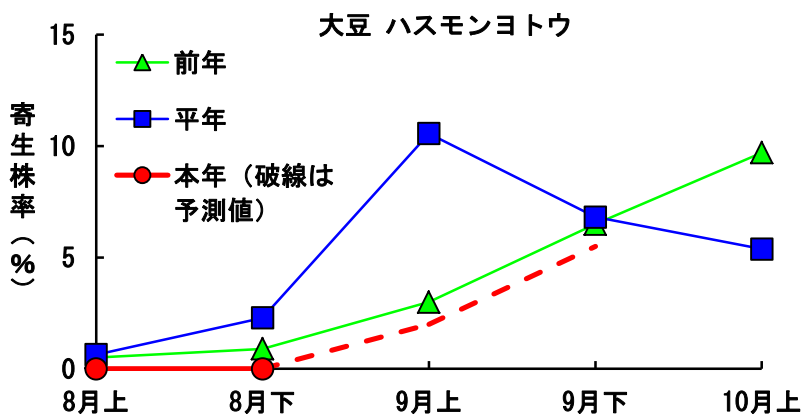


図1 フェロモントラップによるハスモンヨトウの半旬別誘殺数（10月2半旬まで）
（農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。）

3. カメムシ類 (アオクサカメムシ, イチモンジカメムシ, ホソヘリカメムシ, ミナミアオカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生を認めていない（寄生株率：平年0.2%、前年0%）。〈－～±〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている〈±～＋〉。〈気温やや高：±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の防除は莢の伸長初期～子実肥大中期（9月中旬頃まで）が効果的である。
発生が多い場合には7～10日間隔で2～3回防除を行う。

(2) 防除に当たっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

果 樹

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除 のてびきの 記載ページ	備考
		平年比	前年比		
カンキツ	かいよう病	やや少	並	220～222	
	黒点病	やや多	やや多	218～220	
	ミカンハダニ	やや少	並	244～249	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	237～244	
ナシ	黒星病	並	並	282～287	
	ナシメソクイ	並	並	298～301	
	ハダニ類	やや少	並	303～306	
ブドウ	べと病	並	並	326～328	
	褐斑病	やや少	並	329～330	
果樹全般	カメムシ類	並	やや多	カンキツ：251～254 ナシ：301～302 ブドウ：342	平成26年5月21日付け病 害虫対策資料第4号参照

【特記事項】

[カンキツ]

- 黒点病の発生が多い。防除では、マンゼブ剤散布後の積算降雨量が200mm～250mmに達した時点を次回の散布の目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う。
- 長雨と日照不足で収穫後の果実腐敗等の発生が多くなる恐れがあるため、果実体質の強化を図るとともに薬剤防除を徹底する。
- チャノキイロアザミウマによる後期被害を防ぐために、8月中旬～9月上旬の防除を徹底する。特に発生源となるイヌマキ、サンゴジュ等を防風樹として植栽している園や、園内にチャ、サカキ等の樹木が植栽されている園では注意する。
- 園内および園周囲の雑草は、ミカンキイロアザミウマやハナアザミウマ類の発生源となるので、果実が着色する前までに除草作業を行う。
- ミカンサビダニの被害果が認められる園では早急に防除を行う。

[ナシ]

- 黒星病の翌年の伝染源となる鱗片等への感染を防止するために、収穫終了後の防除を徹底する。なお、晩生品種を混植（近接）している園や団地では、薬液の飛散を防止するとともに、使用する薬剤の選定（収穫前使用日数等）には十分注意する。
- 果実が過熟になると輪紋病の発生が助長されるので、適期に収穫する。また、輪紋病の初期病斑は小さくてわかりにくいので、出荷時に箱内に混入しないよう注意する。

[ブドウ]

1. ベと病及び褐斑病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のために、収穫終了後の防除を必ず徹底する。
2. 果実が過熟になると晩腐病が問題になるため、適期に収穫する。

[キウイフルーツ]

1. 県内において、かいよう病の発生が確認されている。疑わしい症状が見つかった場合は、すぐに関係機関へ連絡する。(平成26年5月22日付け [病害虫発生予察特殊報第2号](#)参照)
2. 果実軟腐病は、これまでの長雨・日照不足により発生しやすいと考えられるため、防除を徹底する。

[果樹全般]

1. 本年はヒノキ毬果におけるツヤアオカメムシの寄生が多く、果樹類への被害が遅い時期まで続く可能性があるので注意する。
2. 果樹カメムシ類の今年のヒノキ毬果への寄生量は平年よりやや多く、果樹園への飛来は9月第2～3半旬頃と予想される。ただし、園によっては早い時期に飛来する場合があるので、こまめに園内を見て回り、確認した場合は早急に防除を行う。
3. ヒノキやサンゴジュ等の果実には果樹カメムシが集まりやすく、近隣の園に被害を及ぼす場合があるので、着果しないように刈り込む。

カンキツ

(巡回調査日：8月20～22日)



巡回調査時の生育状況

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない(前年並)

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、温州みかんでの発生を認めていない。(発病葉率：平年0.4%、前年0%、発病果率：平年0.2%、前年0%)<ー～±>

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。<±>

3) 防除上注意すべき事項

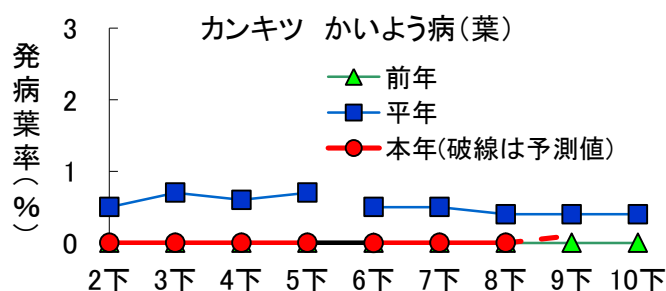
(1)本病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種(ネーブル、いよかん、はるみ等)が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園(幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等)では、無機銅水和剤(クレフノン200倍加用)による防除を行う。散布間隔は20～25日とする。

(2)銅水和剤(クレフノン200倍加用)にマシン油乳剤やマンゼブ水和剤を加用すると銅水和剤の防除効果が低下するので控える。

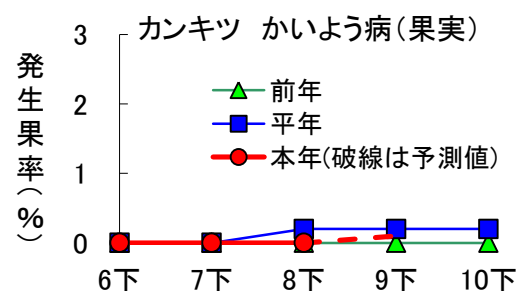
(3)発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。ただし、強剪定すると枝が遅くまで伸長し、本病にかかりやすい期間が長くなるので行わない。

(4)台風の襲来が予想される場合は、襲来の1～7日前までに必ず防除を行う。

(5)ミカンハモグリガの食害が感染を助長するので、防除を徹底する。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査



2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや多い**（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

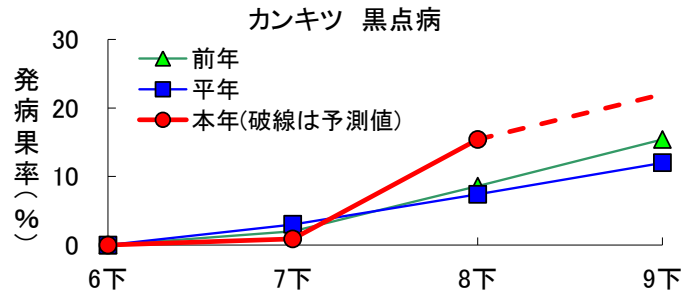
(1) 巡回調査では、発生果率は15.4%（平年7.4%、前年8.6%）であり、平年及び前年よりやや多い。〈±～+〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) マンゼブ水和剤散布後の積算降雨量が200mm～250mmに達した時点を次回の散布の目安とする。なお、同雨量に達しない場合でも、散布1ヵ月後を目安に次回の散布を行う。

(2) 園内湿度を下げるために防風樹の剪定等を行い、通風をよくする。



3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや少ない**（前年並）

2) 予報の根拠

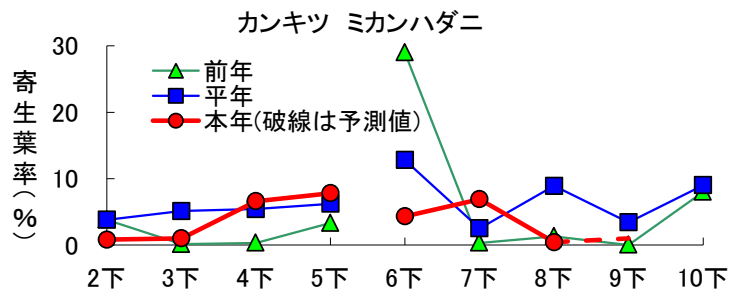
(1) 巡回調査では、寄生葉率は0.4%（平年8.9%、前年1.3%）であり、平年より少なく前年並である。〈-〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ種類の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。

(2) 薬剤の防除効果があがるよう、低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5～1頭）に防除を行う。



ナシ

（巡回調査日：8月21日）



巡回調査時の生育状況

1. ナシヒメシクイ

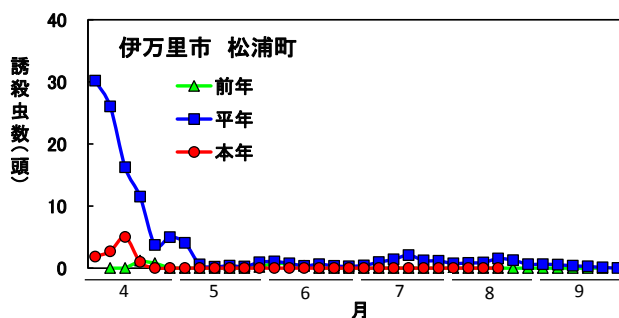
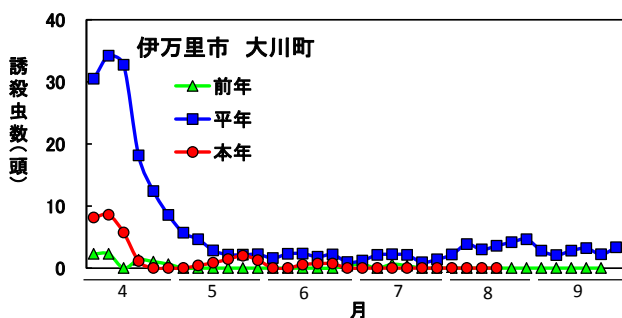
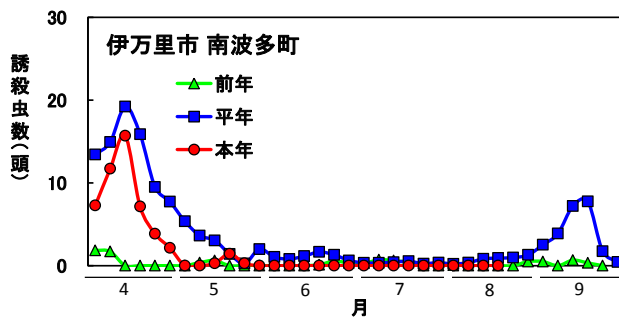
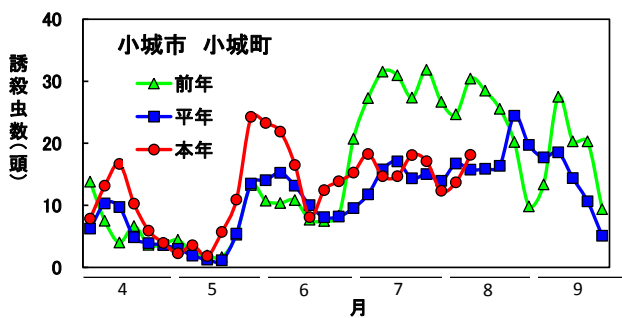
1) 予報の内容

発生量：**平年並**（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 県内4地点に設置したフェロモントラップでの8月上中旬の誘殺数は、平年並で前年よりやや少なく推移している。〈±〉

- (2) 気象予報では、やや多発生条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 有袋栽培を行った場合でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。

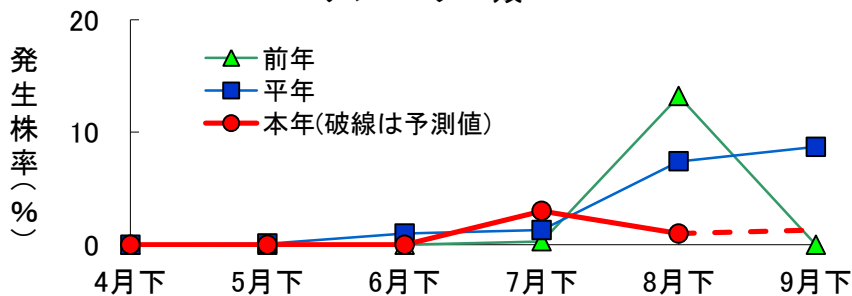


フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺推移
 (小城市は果樹試験場、伊万里市は西松浦農業改良普及センター調査)

2. ハダニ類

- 1) 予報の内容
 発生量：平年よりやや少ない（前年並）
- 2) 予報の根拠
- (1) 巡回調査では、発生葉率は1.0%（平年17.4%、前年13.2%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。〈-～±〉
- (2) 気象予報では、やや多発生条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ種類の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (2) ハダニ類は高温乾燥で急増するので、低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数0.5頭以下）に防除を行う。

ナシ ハダニ類



ブドウ

(巡回調査日：8月21日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生葉率は2.3%（平年7.9%、前年0.5%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

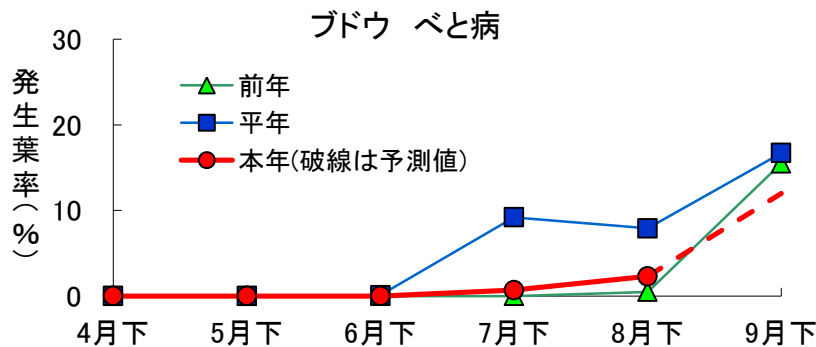
3) 防除上注意すべき事項

(1)降雨によって発病が進展するので、降雨前の予防散布を行う。

(2)罹病葉は、伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。

(3)防除効果を高めるために、棚面の上からも散布するよう心懸ける。

(4)ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）に対する感受性が低下しているため、他系統の薬剤を使用する。



果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

果樹園への飛来予測時期：9月2～3半旬頃から

2) 予報の根拠

(1)発生量

①予察灯（県内3地点；図1、表1）とフェロモントラップ（県内6地点、図2、表2）による誘殺数は8月に入り増加し、平年及び前年並で推移している。〈±〉

②8月下旬に行ったヒノキ毬果における寄生数調査では、1地点あたりの成幼虫数は22.7頭（平年13.4頭、前年7.1頭）で、平年及び前年よりやや多い（表3）。〈±～+〉

③県内各地で採集したヒノキ毬果における8月下旬の平均口針鞘数は11.1本/果（平年12.7本、前年6.2本）で、平年並で前年よりやや少ない（表3）。〈±〉

④気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉（気温やや高：±～+）

(2)果樹園への飛来時期

①ヒノキ毬果における口針鞘数を基に算出した果樹カメムシ類の園への飛来時期は、概ね「9月2～3半旬頃から」と予想される（表3）。

②なお、カメムシ類はヒノキ毬果の種子を餌とするが、調査地点におけるヒノキ毬果の着果指数は「やや多」であることから、上記よりも飛来時期が遅くなる可能性がある（表3）。

③本年はヒノキ毬果におけるツヤアオカメムシの寄生が多く、果樹への被害が遅い時期まで続く可能性がある（表4）。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 地域によっては発生が多い場所があるので、こまめに園内を見て回り、確認した場合は早急に防除を行う。
- (2) 本年はツヤアオカメムシのヒノキ毬果における寄生が多く、果樹類への被害が遅い時期まで続く可能性があるので注意する。
- (3) ヒノキやサングジュの果実には果樹カメムシが集まりやすく、近隣の園に被害を及ぼす場合があるので、着果しないように刈り込む。
- (4) 果樹カメムシ類は樹高の高い樹木に一度飛来して、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないように剪除する。
- (5) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサーチエンス）を生じる場合があるので、これら害虫の防除対策も実施する。
- (6) 県内各調査地点における誘殺状況の推移については、佐賀県農業技術防除センターHPの「[病害虫データ情報](#)」を参照する。

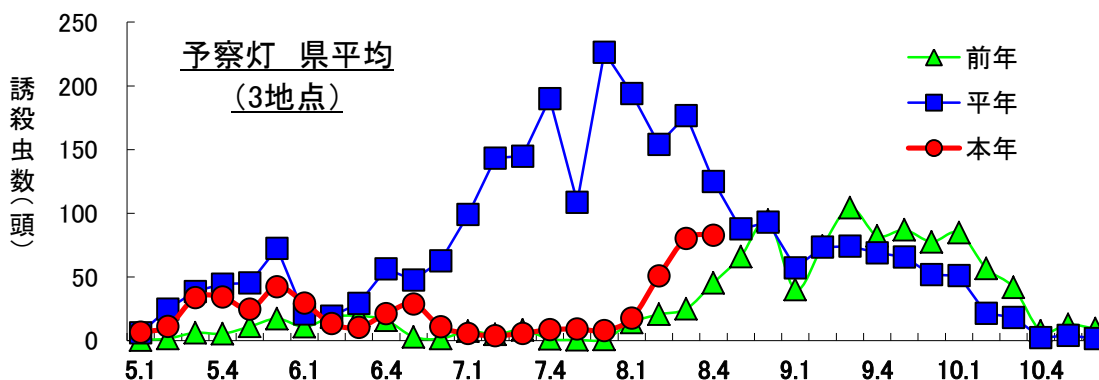


図1 予察灯による果樹カメムシの誘殺状況の推移(県平均)

表1 予察灯による果樹カメムシ類の誘殺状況の推移(県内各調査地点の値)

月・半旬	佐賀市 大和町			小城市 小城町			藤津郡 太良町		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
6.1	45	32	26	61	48	17	0	1	0
6.2	41	38	46	12	37	27	0	1	1
6.3	27	75	34	15	41	44	0	1	0
6.4	56	98	21	24	118	43	0	1	0
6.5	105	97	8	13	81	4	0	2	0
6.6	34	100	0	11	122	6	1	7	0
7.1	20	123	0	2	230	30	2	13	0
7.2	12	145	0	3	373	19	1	10	0
7.3	18	122	0	5	396	34	0	12	0
7.4	32	189	0	2	490	5	0	11	0
7.5	27	83	1	9	289	1		6	0
7.6	24	234	4	7	561	0		19	0
8.1	44	181	35	24	529	22		8	0
8.2	163	210	45	39	351	37		9	0
8.3	227	285	88	94	382	12		7	0
8.4	277	236	141	54	267	40		9	0
8.5		153	117		192	147		5	0
8.6		251	133		232	245		4	0

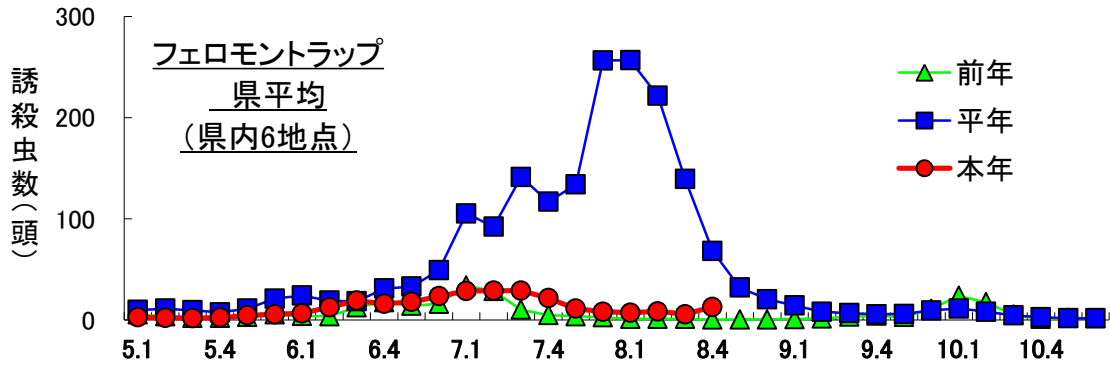


図2 フェロモントラップによる果樹カメムシの誘殺状況の推移(県平均)

表2 フェロモントラップによる果樹カメムシ類の誘殺状況の推移(県内各調査地点の値)

月・半旬	三養基郡 基山町			唐津市 浜玉町			唐津市 鎮西町		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
6.1	0	6	0	0	52	0	2	15	0
6.2	0	4	0	0	29	0	1	14	0
6.3	0	4	2	69	24	8	0	12	1
6.4	0	9	2	45	40	14	0	10	0
6.5	0	22	0	48	56	5	0	8	0
6.6	0	50	2	77	91	5	0	17	1
7.1	1	154	1	79	157	5	2	17	0
7.2	2	34	0	74	196	5	1	7	0
7.3	0	42	2	68	313	2	0	177	0
7.4	0	58	1	56	220	0	0	112	0
7.5	0	102	0	33	221	0	0	16	0
7.6	0	215	0	24	380	0	0	376	0
8.1	11	160	0	10	355	0	0	723	0
8.2	5	103	0	2	515	1	1	335	0
8.3	0	69	0		415	0	1	77	0
8.4	0	35	0		186	0		4	0
8.5		11	0		104	0		4	0
8.6		4	0		73	0		2	0
月・半旬	鹿島市 古枝			伊万里市 南波多町			小城市 小城町		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
6.1	20	32	9	3	15	2	13	9	12
6.2	63	30	12	0	16	0	11	11	9
6.3	38	32	31	0	18	7	7	12	27
6.4	42	43	44	0	49	9	9	14	35
6.5	47	56	45	0	17	1	11	16	32
6.6	44	67	61	0	16	1	19	19	25
7.1	42	98	83	0	27	1	47	73	114
7.2	50	88	97	1	60	0	45	82	68
7.3	86	96	26	1	82	0	19	52	31
7.4	55	78	25	0	101	0	19	56	2
7.5	25	73	19	0	216	0	9	49	3
7.6	14	134	14	0	251	0	11	50	2
8.1	12	91	5	0	162	0	9	33	1
8.2	12	99	2	1	114	3	30	40	1
8.3	16	80	1	3	48	3	8	31	1
8.4	31	33	1	7	58	0		21	1
8.5		11	0		26	2		7	1
8.6		18	0		6	1		4	1

表3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生虫数及び口針鞘数

No.	調査地	ヒノキ毬果における寄生状況					口針鞘数			離脱予測時期 (各調査日から算出)	ヒノキ毬果着果状況
		7月下旬合計	8月上旬合計	8月下旬		8月下旬合計	7月下旬	8月上旬	8月下旬		
				成虫 ¹⁾	幼虫						
1	上峰町	1	20	8	0	8	0.1	3.2	6.5	9月2半旬頃～	中 ²⁾
2	神崎市	18	24	0	1	1	0.7	9.7	15.8	9月2半旬頃～	やや多
3	小城市	4	8	2	0	2	1.3	17.9	16.1	9月1半旬頃～	やや少
4	多久市	9	24	3	2	5	0.2	9.3	16.4	9月2半旬頃～	やや多
5	唐津市1	3	27	18	0	18	0.4	3.7	9.5	9月2半旬頃～	やや多
6	唐津市2	8	35	33	2	35	0.3	5.6	18.8	9月2半旬頃～	やや多
7	伊万里市1	42	30	53	0	53	0.9	11.6	13.8	9月3半旬頃～	やや多
8	伊万里市2	4	7	20	2	22	1.1	4.7	12.8	9月3半旬頃～	やや少
9	伊万里市3	14	9	11	3	14	1.3	2.8	5.0	9月3半旬頃～	中
10	白石町	6	4	1	1	2	1.3	2.6	8.9	9月1半旬頃～	極多
11	鹿島市1	0	33	14	11	25	0.1	0.6	2.3	9月3半旬頃～	やや多
12	鹿島市2	2	7	70	3	73	0.2	1.2	5.5	9月3半旬頃～	多
13	鹿島市3	7	9	39	1	40	0.8	2.6	10.8	9月3半旬頃～	極多
14	太良町1	29	2	16	6	22	0.9	5.1	17.2	9月3半旬頃～	やや多
15	太良町2	12	4	21	0	21	2.0	1.6	7.3	9月2半旬頃～	中
	平均	10.6	16.2	20.6	2.1	22.7	0.7	5.5	11.1	9月2～3半旬頃～	やや多
	平年	14.1	12.8			13.4	3.5	8.4	12.7		
	前年(H25年)	4.5	1.1			7.1	1.0	2.9	6.2		やや少

1)チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの寄生が主であった。

2)ヒノキ毬果着果指数:福岡総農試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査

- ・極少:ほとんど結実が見あたらない
- ・少:梢頭部にわずかに結実
- ・やや少:梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中:梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多:梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

表4 チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシ成虫のヒノキ毬果における寄生数(8月下旬)

No.	調査地	2012年		2013年		2014年	
		チャバネ	ツヤアオ	チャバネ	ツヤアオ	チャバネ	ツヤアオ
1	上峰町	3	1	0	0	8	0
2	神崎市	4	1	1	0	0	0
3	小城市	2	0	0	1	2	0
4	多久市	0	0	1	0	1	2
5	唐津市1	1	0	3	0	6	11
6	唐津市2	2	0	8	3	28	0
7	伊万里市1	3	0	0	0	6	46
8	伊万里市2	3	0	1	2	20	0
9	伊万里市3	6	0	4	1	10	1
10	白石町	4	0	0	0	1	0
11	鹿島市1	5	0	0	0	9	5
12	鹿島市2	22	1	4	0	3	42
13	鹿島市3	4	0	0	0	17	21
14	太良町1	4	0	0	0	15	1
15	太良町2	9	0	32	0	17	4
	平均	4.8	0.2	3.6	0.5	9.5	8.9

茶

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびきの記載 ページ	備考
		平年比	前年比		
茶	炭疽病	やや多	多	393～394	
	輪斑病	並	やや多	394	
	カンザワハダニ	並	並	397～398	
	クワシロカイガラムシ	やや多	多	405～406	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多	402～403	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少	403～404	
	チャノコカクモンハマキ	並	やや多	400～402	
	チャノホソガ	やや多	やや多	399～400	

【特記事項】

1. 県内において、チャトゲコナジラミの発生が確認されている。疑わしい葉が見つかった場合には、すぐに関係機関へ連絡する(平成26年4月9日付け[病害虫発生予察情報特殊報第1号](#)参照)。防除対策は、ホームページ掲載の「チャトゲコナジラミの防除対策」を参照する。
2. チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイは、今後秋にかけて発生が増えるため、開葉期の防除を行う。多発生園では、最初の防除から一週間後にも追加防除を行う。
3. クワシロカイガラムシの防除適期である第三世代幼虫ふ化最盛期は9月中～下旬である。ふ化状況を確認し、適期に防除を行う。
4. カンザワハダニは、多発してからでは防除効果があがりにくいため、低密度時からの防除を徹底する。また、葉裏に生息するハダニに薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

茶

(巡回調査：8月20～22日)



巡回調査時の生育状況

1. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い(前年より多い)

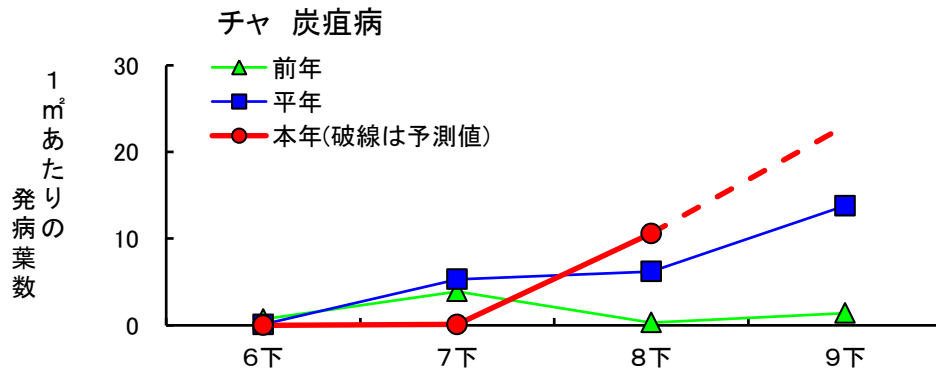
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、1m²あたりの発病葉数は10.6枚(平年6.2枚、前年0.3枚)であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±～+〉
- (2) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 秋芽の充実と翌年への伝染源を抑えるために、秋芽生育期(萌芽～三葉期)の防除を徹底する。

- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。
 (3) 本菌は罹病葉で越冬するため、発生園は整枝により罹病葉を除去し、日当たりおよび通風をよくする。



2. カンザワハダニ

1) 予報の内容

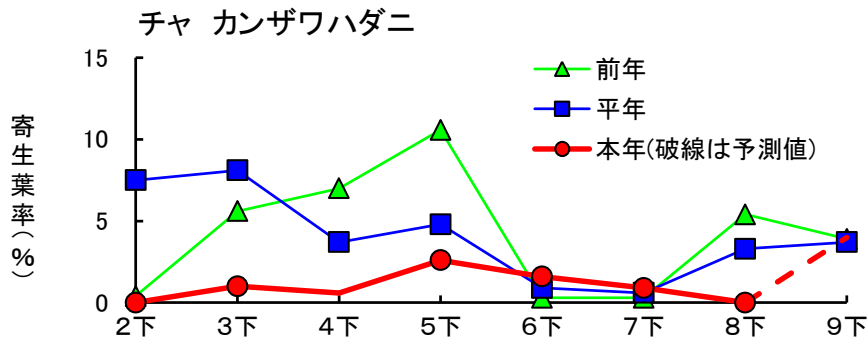
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生を認めていない（寄生株率：平年3.3枚、前年5.4枚）。〈-~±〉
 (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉（気温やや高：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
 (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。



3. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

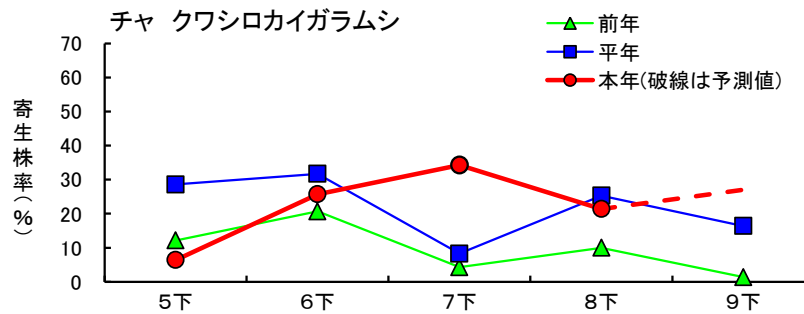
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は21.4%（平年25.3%、前年10.0%）で、平年並で前年よりやや多い。〈±〉
 (2) 気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±~+〉（気温やや高：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 防除適期である幼虫ふ化最盛期は9月中・下旬である。ふ化状況を確認し、適期に防除を行う。
 (2) 第三世代は幼虫ふ化期がばらつくため、多発園では散布間隔を7~14日あけて二回防除を行う。
 (3) 薬液散布は専用ノズルを用い、1000L/10aを目安に薬液が枝全体にかかるよう丁寧に散布する。



4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

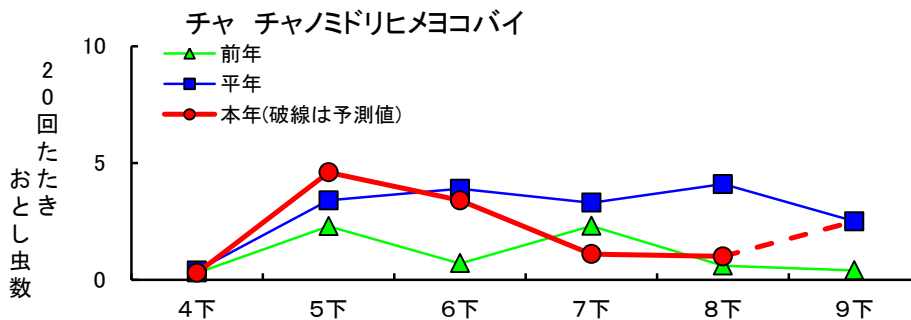
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、20回たたき落とし虫数は1.0頭（平年4.1頭、前年0.6頭）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉

(2)気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±~+〉（気温やや高：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1)幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。



5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、20回たたき落とし虫数は2.4頭（平年31.3頭、前年22.6頭）で、平年より少なく前年よりやや少ない。〈-〉

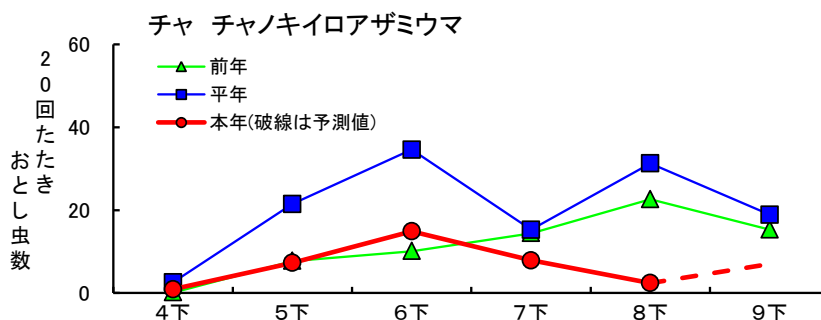
(2)吸引粘着トラップによる誘殺虫数は、7月下旬が21頭（平年188頭、前年228頭）、8月上旬が70頭（平年263頭、前年123頭）、8月中旬が292頭（平年404頭、前年106頭）と平年及び前年並で推移している。〈±〉

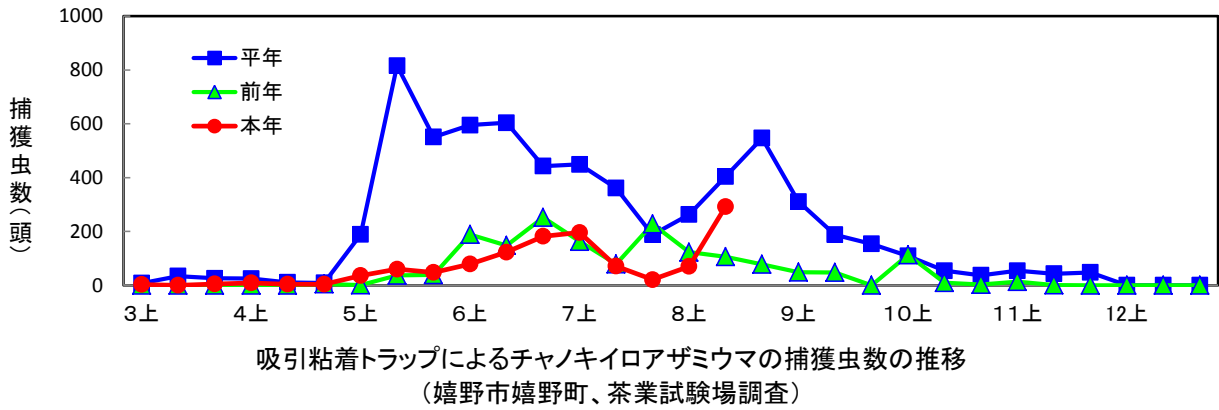
(3)気象予報ではやや多発生の条件となっている。〈±~+〉（気温やや高：±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1)幼虫は葉裏に生息することが多いので、葉裏にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。





6. チャノホソガ

1) 予報の内容

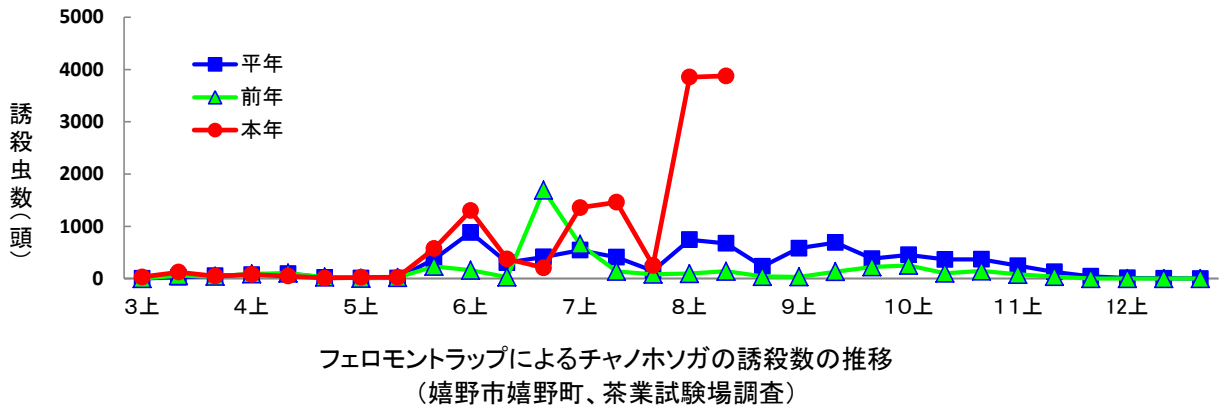
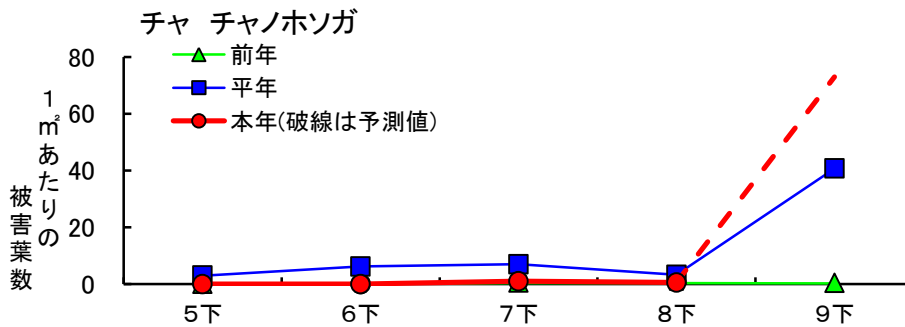
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、1 m²あたりの被害葉数は0.6枚（平年3.3枚、前年0.4枚）で、平年よりやや少なく前年並である。（-～±）
- (2) フェロモントラップによる誘殺虫数は、7月下旬が252頭（平年149頭、前年83頭）、8月上旬が3855頭（平年746頭、前年95頭）、8月中旬が3877頭（平年674頭、前年140頭）と平年及び前年より多く推移している。（+）
- (3) 気象予報ではやや多発生の条件となっている。（±～+）（気温やや高：±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 秋芽の生育期に防除を行う。
- (2) 葉がつづられはじめると防除効果があがりにくいため、つづられた葉が少しでもみられたら直ちに防除を行う。



野 菜

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除のてびきの 記載ページ	備考
		平 年 比	前 年 比		
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	多	多	188～191	平成26年7月31日付け注 意報第2号参照
	苗立枯症	多	多	193～198	平成26年6月27日付け病 害虫対策資料第6号参照
	ハダニ類	並	やや多	199～200	
	アブラムシ類	並	並	204～205	
アスパラ ガス	茎枯病	並	並	298～299	
	褐斑病	並	並	299～300	
	斑点病	並	多	299	
	アザミウマ類	やや多	並	301～302	
	ハダニ類	やや多	やや少	302	
野菜・花き 共通	チョウ目害虫 (ハモシヨトウ、シ イモシヨトウ、材カ バコガ)	並	並	156～158 イチゴ：200～201 アスパラガス：301、303～304	

【特記事項】

[イチゴ]

1. うどんこ病や立枯症、ハダニ類の小苗への伝染を抑えるため、親株の切り離しを終えていない圃場では、早急に切り離し圃場外へ持ち出す。
2. うどんこ病の発生が多い。発病苗の本圃への持ち込みを防ぐため、育苗期の薬剤防除を徹底し、健全苗の育成に努める（[平成26年7月31日付け注意報第2号参照](#)）。
3. 立枯症の発生が多いと予想される。立枯症状や炭疽病による葉の汚斑型病斑が見られる苗は、早急に圃場外へ持ち出し処分する。さらに、定植前の苗に対しては薬剤防除を徹底する（[平成26年6月27日付け病害虫対策資料第6号参照](#)）。また、次年度に向けて健全な親株の確保に努め、親株は優良原種苗を利用して計画的に更新を行う。
4. ハダニ類の本圃への持ち込みを防ぐため、育苗圃において不要な下葉を除去し、薬剤防除を徹底する。

[施設果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）共通]

1. トマト黄化葉巻病やキュウリ退緑黄化病を媒介するコナジラミ類や、トマト黄化えそ病やキュウリ黄化えそ病を媒介するアザミウマ類に対しては、育苗時期から本圃初期の防除を徹底する。
 - ①育苗期後半から定植時に粒剤を施用し、本圃初期の発生を防ぐ。
 - ②施設開口部に防虫ネットを設置して、圃場内への侵入を防ぐ。
 - ③圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。

イチゴ（育苗圃）

（巡回調査：8月18日～19日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：**平年より多い**（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は19.0%（平年5.4%、前年1.0%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

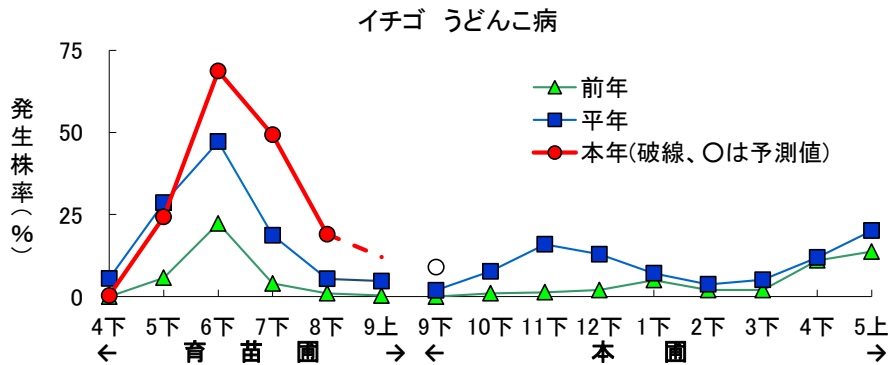
(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏やランナー先端の子苗にも薬液が十分かかるように散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 詳細な防除対策は[平成26年7月31日付け病害虫発生予察注意報第2号](#)を参照する。



2. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：**平年より多い**（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0.3%、前年0.3%）。〈-～±〉

(2) 8月中旬以降、炭疽病による葉の汚斑型病斑が見られる圃場がある。〈+〉

(3) 7～8月の降水量は平年より多く、本病の感染に好適な条件が続いている。〈+〉

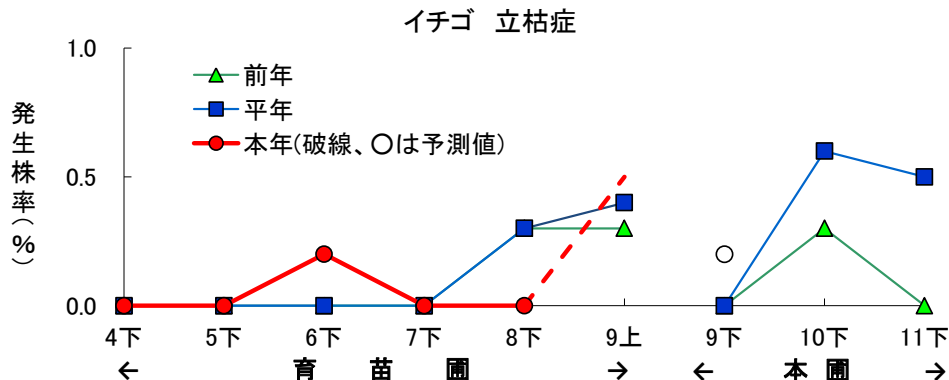
(4) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病株はすみやかに圃場外へ持ち出し、適切に処分する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 詳細な防除対策は[平成26年6月27日付け病害虫対策資料第6号](#)を参照する。



3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

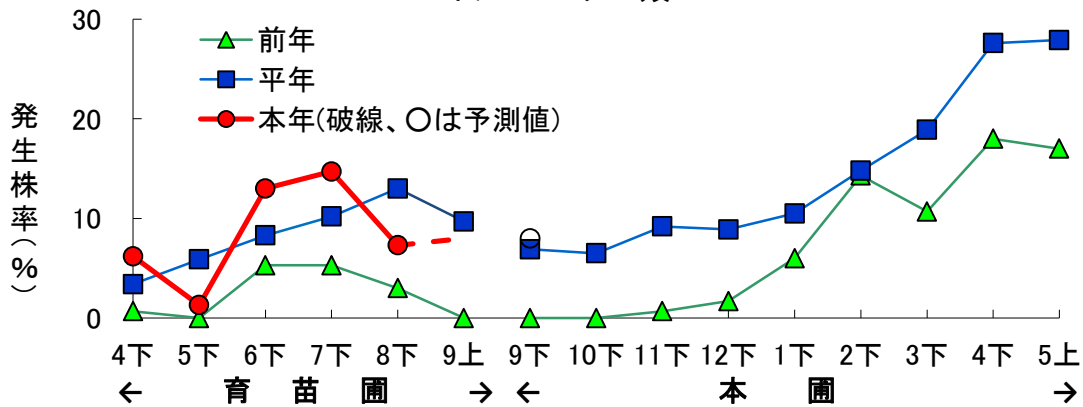
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は7.3%（平年13.0%、前年3.0%）であり、平年よりやや少なく前年よりやや多い。〈-~±〉
- (2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉 〈気温やや高：±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

イチゴ ハダニ類



アスパラガス

(巡回調査：8月18日～19日)



巡回調査時の生育状況

1. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

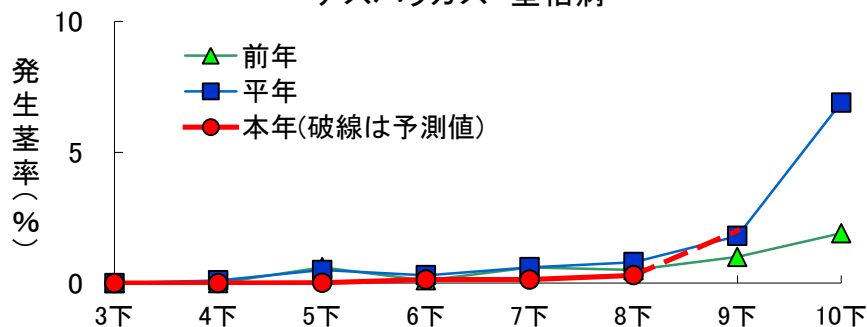
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は0.3%（平年0.8%、前年0.5%）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 罹病茎は早急に除去・処分し、防除を徹底する。
- (2) 雨の降り込みを防ぐため、強い雨風のときはサイドビニルを下ろす。

アスパラガス 茎枯病



2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

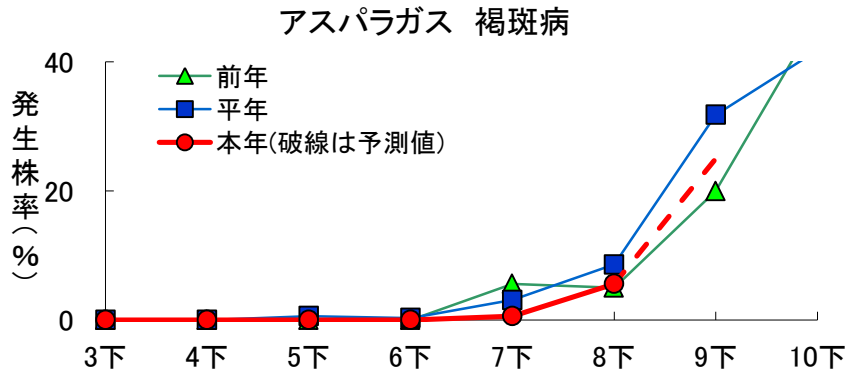
(1) 巡回調査では、発生株率は5.6%（平年8.6%、前年5.0%）であり、平年及び前年並である。〈±〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病葉は早急に除去・処分し、防除を徹底する。

(2) 過繁茂にならないよう、茎葉を適切に管理し、通風をよくする。



3. アザミウマ類（ネギアザミウマ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

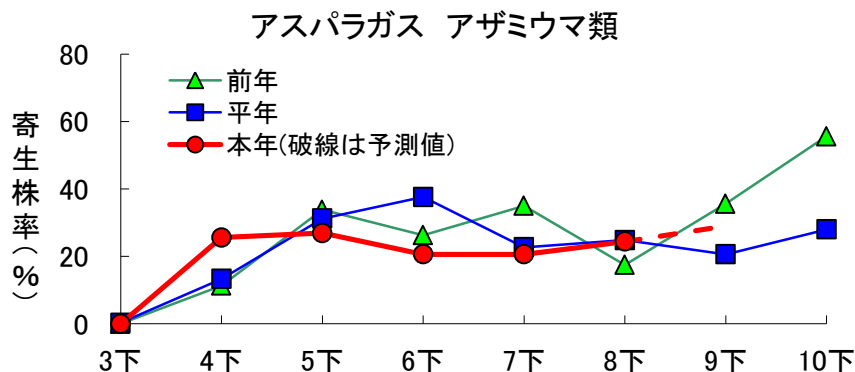
(1) 巡回調査では、寄生株率は24.4%（平年24.8%、前年17.5%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉 〈気温やや高：±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難であるため、低密度時からの防除を徹底する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



4. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや少ない）

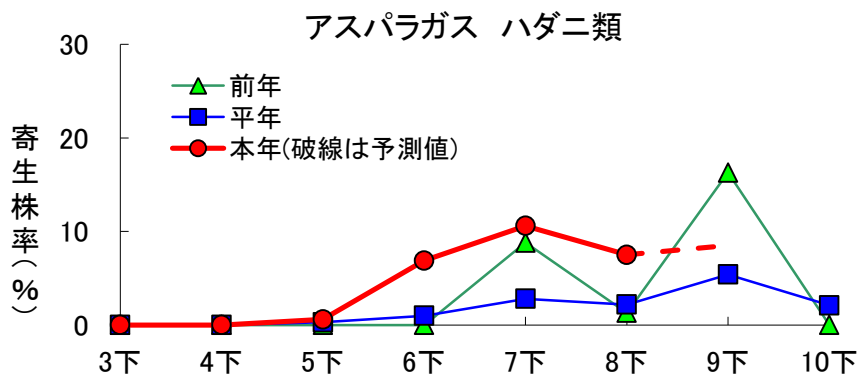
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は7.5%（平年2.2%、前年1.3%）であり、平年よりやや多く前年より多いが、多発生の圃場は一部に限られる〈±〉

(2) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉 〈気温やや高：±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難であるため、低密度時からの防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



野菜・花き共通

1. チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、材ハバコガ)

1) 予報の内容

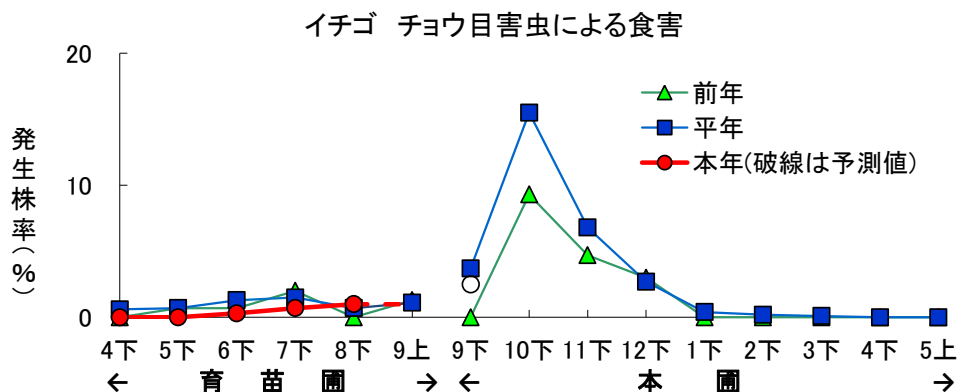
発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、イチゴにおける食害株率は1.0% (平年0.7%、前年0%) であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (2) 巡回調査では、アスパラガスにおける食害を認めていない (食害株率：平年3.3%、前年0%)。〈-~±〉
- (3) フェロモントラップによるハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ及びオオタバコガの誘殺数は平年よりやや少なく推移している (図1~5)。〈-~±〉
- (4) 気象予報では、やや多発生の条件となっている。〈±~+〉 〈気温やや高：±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設開口部に防虫ネット等を設置し、施設内への侵入を防止する。
- (2) 幼虫の齢が進むと薬剤の効果が落ちるので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。



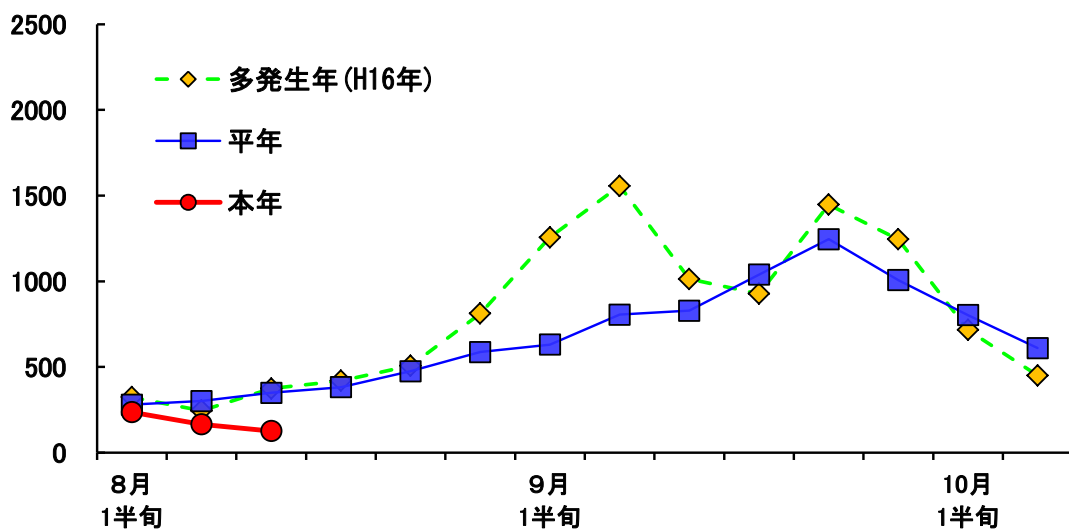
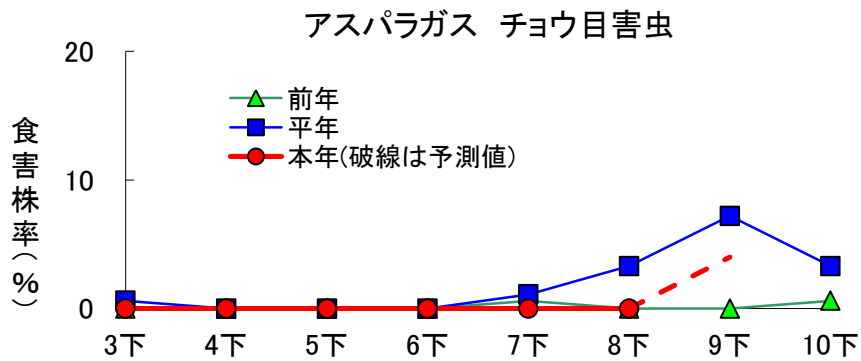


図1 フェロモントラップによるハスモンヨトウの半旬別誘殺数（10月2半旬まで）
 （農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。）

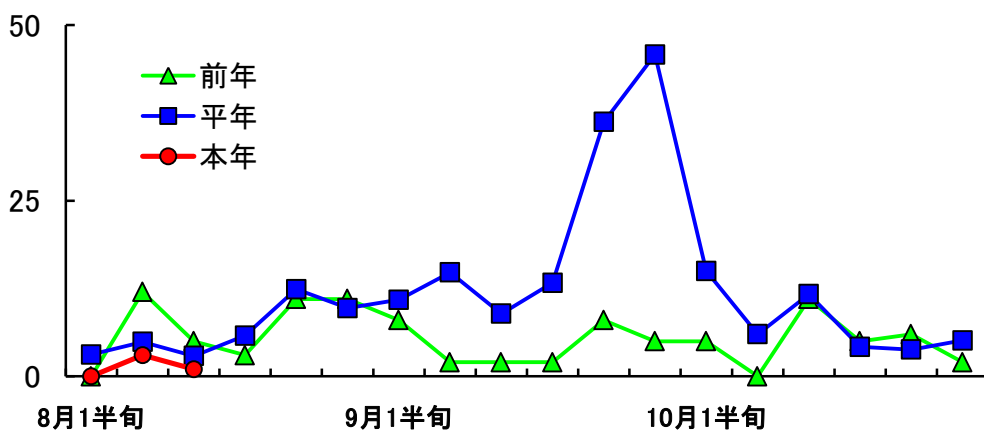


図2 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの半旬別誘殺数
 （川副町・農業試験研究センター調査）

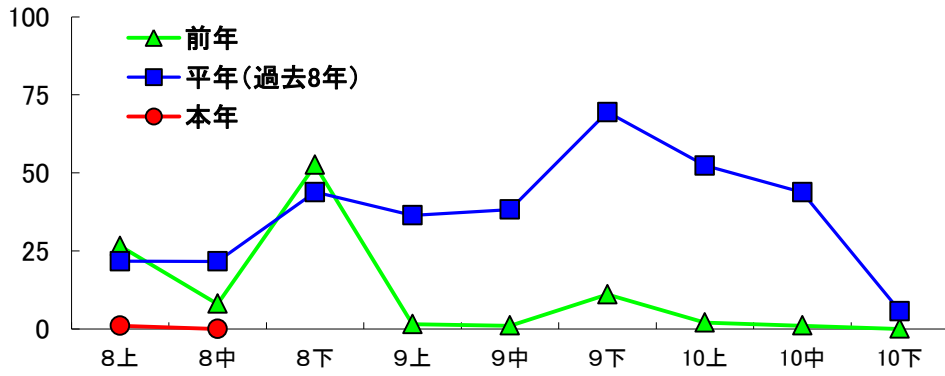


図3 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの旬別誘殺数
(病害虫防除員調査による県内2地点の平均誘殺数)

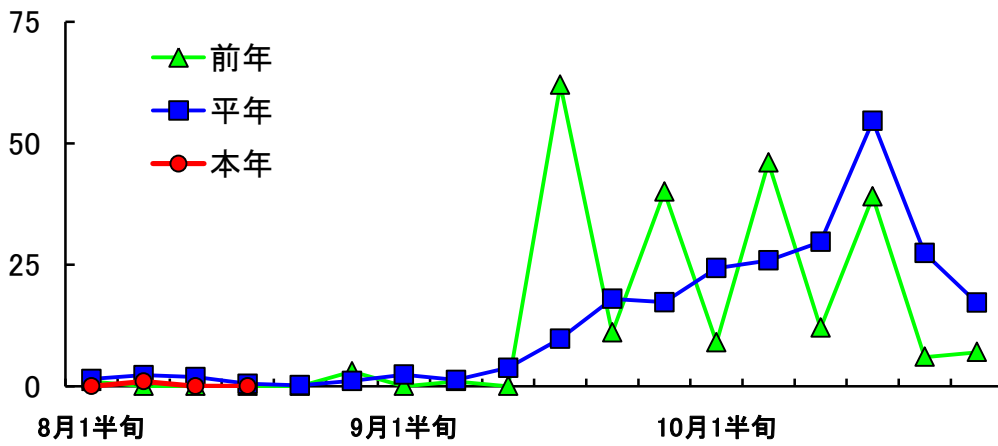


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

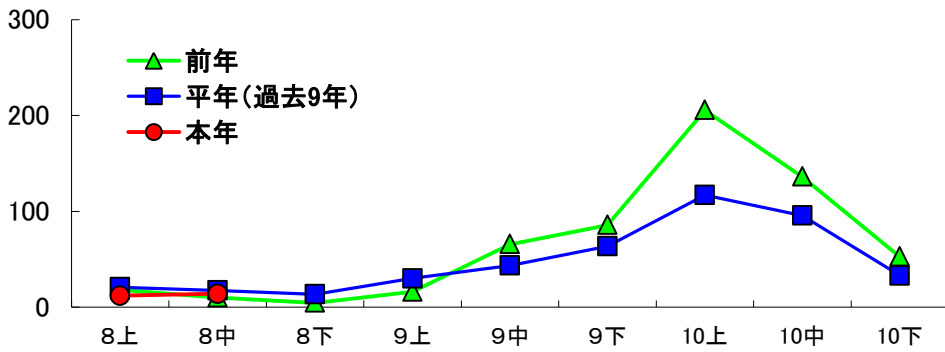


図5 フェロモントラップによるオオタバコガの旬別誘殺数
(病害虫防除員調査による県内2地点の平均誘殺数)

5. 病害虫等診断依頼状況

平成26年7月21日～平成26年8月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

	作物名	依頼件数	診断結果(件数)
普通作	水稲	1	生理障害等(1)
	計	1	
果樹	ブドウ	2	白腐病(1)、チャノキイロアザミウマによる食害(1)
	ミカン	1	生理障害等(1)
	計	3	
野菜	アスパラガス	7	立枯病(1)、疫病(2)、立枯病と疫病の混発(1)、軟腐病(1)、株腐病(1)、ネキリムシ等による食害(1)
	イチゴ	11	炭疽病(2)、萎黄病(3)、疫病(2)、疫病と炭疽病の混発(1)、イチゴメセンチュウによる被害(1)、生理障害等(1)、葉害(1)
	キャベツ	1	生理障害等(1)
	キュウリ	5	黄化えそ病(1)、緑斑モザイク病(1)、黄化えそ病と緑斑モザイク病の混発(1)、苗立枯病(1)、生理障害等(1)
	小ネギ	1	生理障害等(1)
	サトイモ	1	生理障害等(1)
	タマネギ	1	乾腐病(1)
	トマト	5	黄化葉巻病(2)、青枯病(1)、苗立枯病(1)、サビダニ類による食害(1)
	ナス	1	青枯病(1)
	ニガウリ	1	青枯病(1)
	パプリカ	1	炭疽病(1)
	葉わさび	1	卵菌類による地際部腐敗(1)
	計	36	
花き	カーネーション	1	萎凋病(1)
	キク	1	生理障害等(1)
	サクラソウ	1	Phoma属菌による葉枯症状(1)
	シクラメン	2	えそ斑紋病(1)、萎凋病(1)
	スカビオーサ	1	生理障害等(1)
	スピードリオン	1	担子菌類による葉の黒斑(1)
	トルコギキョウ	3	青かび根腐病(1)、茎腐病(1)、ミナミキイロアザミウマによる食害(1)
	計	10	
その他	プラタナス	1	プラタナスグンバイ(1)
	計	1	

合計： 23 作物
51 件

内訳

糸状菌による病害	: 25件
細菌による病害	: 4件
ウイルス・ウイロイドによる病害	: 6件
害虫類	: 5件
線虫類	: 1件
生理障害等	: 10件
合計	51件

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に7月26日～8月25日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
京都府	注意報	2014/07/25	果樹全般	果樹カメムシ類
青森県	注意報	2014/07/25	水稲	いもち病
長野県	注意報	2014/07/25	水稲	いもち病
広島県	注意報	2014/07/25	水稲	いもち病
秋田県	注意報	2014/07/28	水稲	紋枯病
秋田県	注意報	2014/07/28	水稲	いもち病
茨城県	注意報	2014/07/29	水稲	斑点米カメムシ類
長野県	注意報	2014/07/30	水稲	斑点米カメムシ類
岡山県	注意報	2014/07/30	水稲	いもち病
岩手県	注意報	2014/07/31	水稲	斑点米カメムシ類
福島県	注意報	2014/07/31	なし	果樹カメムシ類
佐賀県	注意報	2014/07/31	いちご	うどんこ病
鳥取県	注意報	2014/07/31	水稲	斑点米カメムシ類
大阪府	注意報	2014/07/31	水稲	いもち病
北海道	注意報	2014/08/01	水稲	アカヒゲホソミドリカスミカメ
北海道	注意報	2014/08/04	各種作物	ヨトウガ
佐賀県	注意報	2014/08/06	水稲	いもち病
宮城県	注意報	2014/08/06	水稲	斑点米カメムシ類
秋田県	警報	2014/08/07	水稲	斑点米カメムシ類
大分県	注意報	2014/08/07	果樹全般	果樹カメムシ類
大分県	注意報	2014/08/07	水稲	いもち病
福岡県	注意報	2014/08/08	水稲	いもち病
徳島県	注意報	2014/08/08	野菜類、花き類	オオタバコガ
熊本県	注意報	2014/08/11	早植え水稲、普通期水稲	トビイロウンカ
熊本県	注意報	2014/08/11	早植え水稲	いもち病
山口県	注意報	2014/08/08	水稲	トビイロウンカ
山口県	注意報	2014/08/08	水稲	いもち病
香川県	注意報	2014/08/15	水稲	いもち病
宮崎県	注意報	2014/08/15	普通期水稲	トビイロウンカ
山口県	警報	2014/08/15	水稲	いもち病
長崎県	注意報	2014/08/18	普通期水稲	いもち病
群馬県	注意報	2014/08/15	野菜類、花き類	オオタバコガ
愛知県	注意報	2014/08/18	普通期水稲	斑点米カメムシ類
長崎県	注意報	2014/08/19	いちご（育苗床）	炭疽病
和歌山県	注意報	2014/08/19	カキ・キウイフルーツ、ブドウ	果樹カメムシ類
香川県	注意報	2014/08/20	カキ	炭疽病
佐賀県	警報	2014/08/20	水稲	いもち病
滋賀県	注意報	2014/08/20	水稲	いもち病
鳥取県	警報	2014/08/20	水稲	いもち病
福岡県	警報	2014/08/22	水稲	いもち病
大分県	警報	2014/08/25	水稲	いもち病

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）

発信元	日付	作物	内容
群馬県	2014/07/30	ナス	トビイロシワアリ
愛媛県	2014/08/01	イチジク	モザイク病
佐賀県	2014/08/04	キュウリ	ナスコナカイガラムシ
和歌山県	2014/08/06	キュウリ	退緑黄化病（CCYV）

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）

発信元	日付	作物	内容
宮崎県	2014/07/25	水稲、飼料イネ	トビイロウンカ、セジロウンカ
宮崎県	2014/07/25	かんきつ	黒点病
宮崎県	2014/07/25	茶	ヒメヨコバイ、アザミウマ、カンザワハダニ
福岡県	2014/07/30	いちご	炭疽病の潜在感染状況
鹿児島県	2014/07/31	キャベツ	コナガに対する薬剤効果試験
熊本県	2014/07/31	早植え水稲	いもち病の発生状況
熊本県	2014/07/31	水稲	コブノメイガの発生状況
宮崎県	2014/08/06	普通期水稲	いもち病
佐賀県	2014/08/06	水稲、果樹、茶、野菜	長雨、日照不足にかかる病害虫防除対策
大分県	2014/08/07	野菜類	ワタアブラムシ
鹿児島県	2014/08/08	普通期水稲	トビイロウンカ
佐賀県	2014/08/12	水稲	トビイロウンカ第二世代幼虫の防除の徹底
熊本県	2014/08/13	果樹	果樹カメムシ類の発生状況
熊本県	2014/08/19		ハスモンヨトウの発生状況及び防除対策
長崎県	2014/08/19	果樹	果樹カメムシ類の発生量及び飛来時期
長崎県	2014/08/19	普通期水稲	トビイロウンカの防除対策
長崎県	2014/08/19	普通期水稲	穂吸汁性カメムシ類の防除対策

注：太字は佐賀県が発表したものを示す

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

農薬を散布するときには、農薬の飛散に注意しましょう！

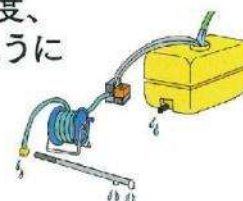
- ・ 風向きに注意して風の弱いときに散布しましょう。
- ・ 散布の位置や方向に注意して散布しましょう。
- ・ 適正なノズルを用いて、適正な圧力で散布しましょう。



農薬の散布前および散布後には、以下に
気をつけて農薬事故を未然に防ぎましょう！

農薬を散布する前に注意すること

- ◎ ラベルをよく読んで、対象作物や散布時期を確認しておきましょう。
➡ 事前に確認することで、農薬の使用方法等の誤りを防止できます。
- ◎ 散布に使用する器具のチェックを行いましょう。
➡ 器具の不具合による農薬の事故を未然に防げます。
- ◎ 農薬の調整前には、事前に使用する農薬の散布濃度、散布面積等を確認し、必要量を調べて、余らないように調整しましょう。



農薬の散布後に注意すること

- ◎ 残った希釈液は河川、湖沼、用水路、下水等の水系に廃棄しないようにしましょう。
➡ 農薬が河川に流入し、魚などの水産動植物に思わぬ影響を及ぼす恐れがあります。
- ◎ タンクやホースは洗い残しが無いようきれいに洗っておきましょう。
➡ 前回使用した農薬をタンクやホース内に残したまま、別の作物に使用すると国が定めた基準値を超過する恐れがあります。
- ◎ 残った農薬による誤飲、誤用等を避けるため、他の容器（飲料用ペットボトル等）への移し替えは絶対に止めましょう。
➡ 移し替えた農薬を、誤って使用したり、誤飲する事故が発生しています。
- ◎ 盗難を防止するため、農薬の保管庫にはカギをかけましょう。



(佐賀県植物防疫協会パンフレットより)